

この編集後記を書いている時点で、東日本大震災からちょうど3ヶ月経ちました。福島第一原発事故はいまだ収束の筋道がみえず、いまま、9万人以上が避難所での暮らしを強いられています。今月の沖縄県医師会報でも、まず目につくのは、震災関係の記事です。4月24日に行われた日本医師会定例代議員会において、震災直後は急性期の入院患者が多く大変厳しい状況に置かれたこと、全国各医師会から支援が寄せられ、献身的に必至な活動を行っているとのことなどが報告されています。沖縄県医師会の災害救助医療班第4陣から第6陣までの現地レポートでは、現地の悲惨な状況が伝わってきます。戦争を体験したことのない私たちですが、高江洲信孝先生の「私の想像する戦場が目の前の光景と一致した」という文章はよく分かる気がします。それでも、避難所での秩序ある生活ぶりに日本人であることを誇りに思ったという言葉は印象的でした。今月の震災関連の記事には、県医師会副会長の玉城信光先生より県医師会としての震災医療支援が5月31日に無事終了したとの報告がありました。被災地の方々から大変感謝されただけでなく、派遣された方々からも感謝されたとのこと。医療支援に携われた皆様に深く感謝を致します。震災医療支援の報告は、来月以降も引き続き掲載予定です。

沖縄県医師会感染症・予防接種講演会において、琉大産婦人科の青木陽一教授より子宮頸がん予防ワクチンについての講演が報告されています。沖縄県は、子宮頸癌の罹患率が全国と比べ非常に高く、HPVワクチンの普及が子宮頸癌の減少に役立つことが期待されています。また、沖縄県周産期保健医療協議会の概要が報告されています。沖縄県は、出生率、低出生体重児の出生率、10代の出生率が全国一高く、周産期・乳児・新生児死亡率は全国平均より低く良い傾向にあること。妊産婦死亡率は、全国平均より高く、毎年1人の妊産婦を失っているとのこと。また、北部地域の産科医の不足により様々な問題が生じており、今後の方向性と

して、医師、助産師、看護師の人材育成が大きな課題であります。

女性医師部会からは、仁井田りち副会長より「沖縄県女性医師部会発足からの歩み」と題する報告が寄せられました。平成19年に女性医師部会が発足後これまで様々な企画がされてきたことが分かります。女性医師が働きやすい環境を目指して、私たち一人一人の理解・協力が必要だと再認識させられました。

生涯教育のコーナーからは、琉大第二内科の益崎裕章教授より、「日常臨床における脂質異常症の取り組み；最近の考え方」と題する論文を頂きました。近年高脂血症という言葉より脂質異常症という用語に変わった理由が、数値が低すぎることが問題となる低HDL-C血症や脂質の質的変化が重要であるからとのこと。沖縄県は肥満を背景にした糖尿病や脂質異常症が多く、健康長寿の復活のためにも脂質異常症の理解が大事であると思われま。

プライマリ・ケアコーナーは、小児クリニックたまなはの玉那覇康一郎先生の「増えている食物アレルギー」です。食物アレルギーは近年増えており、その原因と考えられるのが、過剰の栄養摂取、化学物質摂取、周りの環境がきれいになりすぎたことなどとのこと。アナフィラキシーショックには、「エピペン」が処方可能となりましたが、まだまだ、その存在が知れ渡っていないのが実情の様です。

中部地区医師会会長の安里哲好先生からは随筆を、てるや整形外科の照屋勉理事からは「親睦囲碁大会参戦記！」と題して、石津靖先生からは本の紹介を、さらに、稲福内科医院の稲福徹也先生からは、開業顛末記を頂きました。厚く御礼申し上げます。

今年の沖縄は、観測史上最も早く梅雨明けしたそうです。これから暑い夏を迎えますが、沖縄県医師会員の皆様、体調にお気をつけてお過ごし下さい。

広報委員 旭 朝弘